◇邪馬台国はどこか／火瓊瓊杵の日前国と西都／天火明の日高見国と東都

①（帯方）郡より倭に至るには、海岸に沿って水行し、韓国をへて或いは南し、或いは東して、その北岸狗邪韓国に至るまで七千余里。

②（狗邪韓国より）はじめて一海を渡り、千余里にして対馬国に至る。

③また一海を渡ること千余里、・・一大（一支、壱岐）国に至る。

④また海を渡り、千余里にして末盧国に至る。

⑤東南に陸行すること五百里、伊都国に至る。

⑥⑦東南して、奴国に至るまで百里。東して、不弥国に至るまで百里。

⑧（狗邪韓国より）南して投馬国に至る、水行二十日。

⑨（狗邪韓国より）南して邪馬臺（台）国に至る、女王の都する所にして、水行十日、陸行一月。

⑩次に奴国ありて、これ女王の境界の尽くる所なり。其の南に狗奴国ありて、男子を王と為す。女王に属さず。

其の八年、太守王頎、官に到る。倭の女王卑弥呼、狗奴国の男王卑弥弓呼と素より和せず。倭の載斯・烏越などを遣わして郡に詣らしめ、相攻撃するの状を説く。塞曹掾史張政等を遣わし、よって詔書・黄幢を難升米に拝受せしめ、檄をつくりてこれを告喩す。

☆第二次大戦後、中国では、「史記」から「明史」に至る二十四史の整理・出版事業が始まった。この事業は中華書局と大学の連携の下、一字一句まで吟味されて四半世紀後にようや

く完成した。従って余ほどの理由がない限り一句一字たりとも違えるべきでない。

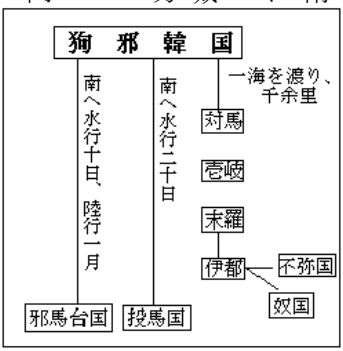
①～⑥を地図上で追っていくと、末盧国は唐津、伊都国は佐賀平野、奴国は筑後川南の旧山門郡・旧大和町辺りに到る。伊都国のあった佐賀平野には、後世の国府が置かれた旧大和町、徐福を祀る金立神社、吉野ケ里遺跡がある。

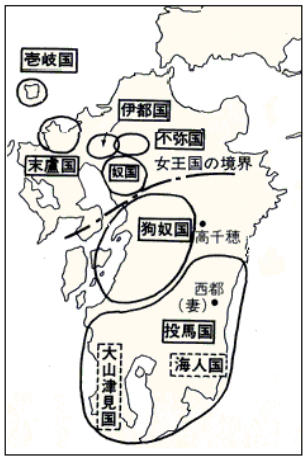
⑧⑨については、狗邪韓国を起点にとると、本書の筋書き通り、投馬国は宮崎県西都市妻地区、邪馬台国は奈良盆地の大倭（大和）に到達する。

後者の国域は琵琶湖以南の南近畿一帯、すなわち滋賀県や京都府の南部、大阪府・奈良県・和歌山県・三重県の全域、さらに兵庫県南東部に及び、七万戸（約四〇万人）もの人口を擁していた。

☆当時の河内地方には、広大な内海の河内湖が上町台地（大阪城辺り）から生駒山麓にかけて広がっていた。淀川上流の宇治地方には巨大な巨椋湖があり、その北に琵琶湖が横たわっていた故、邪馬台国はさながら大きな島のごとく思われた。

ここにある対馬、伊都国、邪馬台・倭、大倭、投馬については、同じ読みの漢字、同じ読みの地名・国名が「記紀」や神社名にもあり、対馬、伊都・厳、倭・日本・大和・山門、大倭・大日本、妻・都万と呼ばれてきた。対比してみよう。





対馬国↓長崎県対馬　投馬↓西都市大字妻、西都市大字妻の都万（都萬）神社
伊都国↓「記紀」の伊都之尾羽張（いつのおはばり）、伊都之尾羽張剣、厳之尾羽張、稜威雄走（いつのおばしり）、厳姫
邪馬台国、倭↓「記紀」の倭・日本、奈良県の大和国、筑後川南の旧山門郡・旧大和町
大倭↓「記紀」の大倭・大日本、奈良県の大倭神社

双方を見比べると、「倭人伝」記載の国々が実在した地名に基づいてるのは明白である。これは取りも直さず、「倭人伝」や「記紀」の信憑性がすこぶる高いことを証明している。

これらを踏まえた上で、この時代の歴史について、このように考えた次第だ。

《大乱前、日隈（熊野家）の伊奘諾は、北九州に都する倭奴国〔倭国＋豊葦原中つ国（奴国）、天地〕王朝の六代女系天神・天之尾羽張から東方統治と共に、神国・常世づくりを託されたが、四苦八苦してきた。将にその時、常世思想に加えて仏教や学問に並外れた才のある大穴持（天竺や天台山から飛来したマガダ国王、山王、牛頭天王）が豊葦原中つ国王にのし上がってきた。

〔**熊野権現の事**〕、甲寅の年に唐の霊山より王子晋の旧跡が日本の鎮西豊前国の彦根大嶽（英彦山）に天降り、神武天皇の治世四三年壬寅に熊野権現として顕れた。権現は天照大神の頃の人で、全国に広く示現されている。その後、本朝に仏教が渡来したが、まだ幽微であった。

〔**熊野権現垂迹縁起**〕、天竺のマガダ国大王は、妃たちが起こした惨事を嘆いて王位も国も捨て、「我が身はどこへ行けばよいのか決めかねている。この剣を投げて、落ちた所に行こう」と言って五本の剣を北に向けて投げ、空飛ぶ黄金の車に乗って追いかけた。五本の剣は小さな小さな日本秋津島に飛んで行き、一本は紀伊国牟婁郡神蔵（神倉山）、一本は筑紫の英彦山・・に留まった。

伊奘諾は彼の噂を耳にするや、天竺を凌ぐほどの常世づくりを実現したいと目論み、養子に取り込んだ。ついで向津姫（六代女系天神の宗女）の婿養子に押し込むと同時に、日隈（熊野家）の皇太神と月神（月読命）に据え、東方を管轄する副都月の都、唐古（田原本町）の経営を任せた。

だが皇太神は、オロチ三輪大物主・水穂厳之国ら畿内勢と盟約して、オロチ厳之国王朝を再現した邪馬台国（瑞穂の厳之国王朝）を月の都に建て、天照大神と僭称して東海から北九州まで瞬く間に席巻した。その結果、伊奘諾も向津姫も素戔嗚も、南国の熊襲に逃げ落ちる他なかった。

その後の天照大神は、三輪氏と太氏、大神（おおみわ）家、水神と火神を尊ぶ諸々の瑞穂国や水穂国、海神族・鴨族らの上に君臨すると、天叢雲剣（中細銅剣）を天璽にかざしながら水天神、天叢雲、倭大物主、大蛇・小蛇と語り、邪馬台国方の国々を思うままに操ってきた。

邪馬台国の興亡を振り返ると、①建国当初、水天神の天照大神が唐古に都した瑞穂厳之国王朝、②二二〇年代中頃から、日・水の神を奉る倭女王ヒミコが纒向に都する天（厳）之国王朝（倭国）、③二五〇年代前半からは、火明饒速日（海幸彦、三代垂仁）が日と瑞穂の天神に立つ日本王朝に移り変わったが、三世紀末、日向から東征した磐余彦率いる東征軍に敗れ去った》

この経緯を踏まえつつ大倭、高天、出雲、南九州に目をやると、その国の歴史が垣間見える。

大乱前の大倭では、大倭家が月の都唐古に副都して東方統治に勤しんできたが、大乱最中に天照大神に戦わずして跪いた結果、三輪大物主と太氏の共立した大神家にとって代わられた。

臣下に成り下がった大倭家は、人質として送られてきた伊弉諾嫡子の日子（蛭児）を推戴して商売繁盛の神として崇めつつ、租税の徴収や管理、国々の市場監察など閑職に甘んじてきた。

「倭人伝」、「租賦を収むるに邸閣あり。国国に市あり。有無を交易し、大倭をして監せしむ」

☆蛭子にちなんだ恵比須神社（桜井市三輪）も箸墓辺りの大市の地名も、この市に由来する。

〔三輪恵比須神社〕（奈良県桜井市三輪）、祭神は八重事代主命、八尋熊鰐命ら。市場の守護神、日本最初の市場の神、神託を司る神として崇敬されてきた。日本初の市場、海石榴市（椿市）は、三輪山南麓の金谷地区を流れる初瀬川べりで物々交換の場として開かれた。

大乱後、高天の高千穂宮では、六代女系天神の宗女、向津姫が日神の天照大御神に担がれるや、

臣下らは石窟戸前で八咫鏡二面（日前鏡と真経津鏡）を鋳造して、真経津鏡を天璽に奉献した。

攝津と播磨には、豊葦原瑞穂国や国主取り替え癖のある三島鴨族が深く広く根を張っていた。前者は、かつて豊葦原中つ国が淀川中流域に策封した分家だったが、大乱最中に本家と袂を分かって天照大神にすり寄り、瑞穂厳之国王朝建国に一役買った結果、重鎮に取り立てられた。

淀川中下流域に割拠する三島鴨族は、火神の面足神を六代倭王に担いで栄華を誇ってきたが、伊奘諾政権に移るや右往左往した。当初は火神で山の神の大山祇、次に伊奘諾実子の火軻遇突智（ほのかぐつち）、再度大山祇を推戴したが、大乱で天下がひっくり返るや、勝ち馬の天照大神に乗り替えた。

同じ頃の出雲では、豊葦原中つ国が豊国と葦原中つ国に割れる寸前にあった。

素戔嗚は高千穂宮から新羅に出奔した数年後、奥出雲に潜入して出雲熊野家と豊葦原中つ国の再興に奮闘したが、オロチ佐太国に養子に出した実子大己貴（大穴持襲名）に悉く妨害された。その最中に、豊国は一族郎党ともども出雲から去り、丹後、摂津、尾張に移ったらしい。

『日本書紀』「然して後に、素戔嗚尊、櫛稲田姫に生ませたまえる児を大己貴と号す」、二一〇年代前半、大己貴は葦原中つ国再建を果たすや、越（高志）オロチ勢と組んで邪馬台国を西と北から執拗に攻め立てた。ところが二二〇年代初め、彼は高皇産霊の送り込んだ遠征軍に戦わずして屈服し、天神の御子に国譲りすると誓わされた。

福岡平野の那珂川中流域では、縄文期の那珂つ国を継承した中つ国一門が周辺の新参者に所領をちびちび削り取られながらも国体を維持してきた。

福岡平野西の糸島平野には、一世紀前半以来、倭奴国王朝が怡土井原に天宮して数多の官民に守られてきたが、大乱後にその大多数が四散した。家臣に逃げられた王朝一族は西の平原にひきこもり、時節到来を待つ他なかった。

【平原遺跡墳丘墓】（福岡県糸島市）、巨大な方形周溝墓の木棺外部から鉄製の素環頭太刀一

本、ガラス製勾玉・メノウ製管玉多数、ネックレス・ブレスレット・イヤリングなど装身具、破断された四〇面分の鏡（方格規矩鏡三二、径四六・五センチメートルの内行花文鏡五）などが出た。そこには、三角縁神獣鏡は一枚も存在しない。周溝の土壙墓からも鉄鏃・鉄刀子が出土した。

この王墓は厳之国の尊ぶ方形墓であるものの、副葬品として天之国祭器の鉄剣、数多の方格規矩鏡、厳之国の称える巨大な内行花文鏡数面分の破片が添えられていた。築造時期は、二〇〇年頃とする見方が有力だ。そうだとすると、墓主は天之国の権力者として大乱に関わってきたことになる。調査主任だった原田大六氏は、副葬品の内容から女性の墓と睨んでいた。

一方、糸島平野から古巣の吉野ヶ里に押し戻された伊都国は、天之国六代天神、天之尾羽張の愛児を王に推戴した結果、再度蘇ったが、大乱時に敵軍に包囲されるや、あっさり跪いた。その後は、敵の指示を仰ぎつつ内外濠を掘り下げて各所に物見櫓を建て、西海一の砦に変貌した。

二二〇年代前半、則ち日神が天孫火瓊瓊杵に吾田降臨を命じた直後、夫の高皇産霊（天照大御神に大政奉還して高千穂宮に赴く天照大神、所造天下大穴持）は大倭に向かった。道中の出雲や丹後で、皇孫天火明と大己貴を連れて大倭に戻ると、天火明に丹後・尾張の統治、常世づくり、大倭日高見国の建国、さらなる東の領土拡大を命じる一方、自身は仏法や常世思想、磐座信仰、神仙の国・蓬莱郷づくりを散りばめた所造天下策に乗り出した。

それ以前から、天照大神は海神から天照大神旗下に鞍替えした出雲の豊葦原中つ国、尾張の海部家本家、丹後の海部家分家を四方に睨みを利かす重鎮に持ち上げる一方、嫡子天羽羽を出雲と尾張に、その児天火明を丹後海部家家長に据えた。この時代、天照大神に伏した豊葦原中つ国は倭奴国王朝建国の祖、厳香具土（かぐつち）の襲名を天羽羽（ははは）に譲った結果、天羽羽は天鹿児（かご）山と語ってきた。

その彼が奥出雲山中で素戔嗚に不意打ちされたことで、その児の天火明が丹後・尾張の両海部家、さらに日高見国に君臨し、その孫の天香山も天火明名代として尾張を統治してきた。

〔**籠**（この）**神社**〕（京都府宮津市）、主祭神は、彦火明命。相殿に豊受大神、天照大神、海神などを祀る。眞名井原に鎮座する奥宮（眞名井神社）は神代の鎮座地とされ、豊受大神と天照（皇）大神を祀ってきた。大化改新後の白鳳十一年（六七一年）、祭神の彦火火出見尊が雪の中から籠に乗って現れたという伝承に基づき、社名を籠宮と改め、彦火火出見を祀ってきた。

【籠神社の海部氏系図本系図（国宝）】　始祖彦火明―〇―〇―三世孫倭宿禰―武振熊

☆この海部氏系図は、戦前には問題視されて門外不出とされてきた。だが戦後、その価値が見直されて国宝に指定された。

〔**真清田**（ますみだ）**神社**〕（愛知県一宮市真清田）、祭神は、天火明命。

境内由緒に、「祭神天火明命は、天孫瓊瓊杵の御兄神に坐しまし国土開拓、産業守護の神として御神徳弥高く、尾張国はもとより中部日本今日の隆昌を御招来遊ばされた貴い神様」とあるそうな。

「大祓（おおはらえ）の詞（ことば）」、「此（か）く依（よ）さし奉（まつ）りし四方（よも）の国中（くになか）と大倭日高見国（おおやまとひだかみのくに）を安国（やすくに）と定め奉りて、下つ磐根に宮柱太敷き立て　高天原に千木高知りて皇御孫命の端の御殿仕え奉りて・・」

当時の東国では、日高見勢が関東や尾張を荒らして回り、人民や農作物を掠め取っていた。これに対して天照大神は、「彼らを追っ払うか、捕えて南国に送り込め」と天火明に下知してきた。

一二〇年代中頃、日神は素戔嗚らと共に高千穂宮を去り、大倭に向かったが、その途上で夫が急逝した。纒向入りした日神は邪馬台国・高天の双方から倭女王ヒミコに共立されると、素戔嗚を元帥・女王補佐役兼務の卿、大己貴を都の治安・外交を司る太夫に任じ、所造天下を急がせた。

【纒向遺跡】（奈良県桜井市）、三世紀前半、纒向に突如として巨大都市が出現した。その大きさは四平方キロメートルに及び、唐古・鍵や吉野ケ里を凌いで邪馬台国時代の最大都市に発展していく。それが四世紀初めになると、衰退に向かった。

「出雲国造神賀詞」、「大穴持の申し給わく、『皇御孫尊の静まり坐さむ大倭国』と申して、己の和魂を八咫鏡に取りつけ、倭の大物主、櫛甕玉尊と称えて大御和の神奈備に坐せ・・」

河内では、薩摩から舞い戻った天児屋が生駒山西麓に領地を賜り、女王の祭祀を助けてきた。

二二〇年代後半、天火明（三代垂仁）は経津主・武甕槌・事勝国勝（塩土老翁）ら大軍を引き連れ、武蔵、常陸、仙台平野を席巻して陸奥国（みちのく）（福島県～宮城県松島あたり）まで国域を広げた。

その直後、女王ヒミコは天火明率いる日高見国を千葉県市原市に国替えして東都を開かせた。

〔**神門**（ごうど）**五号墳説明板**（千葉県市原市教育委員会、平成二六年三月）**要旨**〕、「邪馬台国時代の西暦三世紀になると、汎列島規模で地域間の交流が活発になります。

この時期、国分寺台地区の中台遺跡、南中台遺跡、長平台遺跡、天神台遺跡などでは、近畿地方（奈良県、滋賀県周辺）や北陸地方（福井県周辺）、東海地方（愛知県、静岡県周辺）、北関東地方（茨城県、栃木県周辺）などの特徴を持った土器が出土し、こうした地域からの移住や交流の地として、国分寺台地区は東日本でも拠点的な地域となりました。

これらの遺跡群を中核とした地域統合の象徴として、神門古墳群（三号、四号、五号墳）がつくられました。また、遺跡群の中心となる中台遺跡では、祭政の場と推定されている神殿風の掘立柱建築跡も発見されています。幅六㍍の周濠がめぐる古墳群中最古の五号墳は、墳径三〇～三二・五㍍、高さ五㍍の後円部と、その西側の長さ一二㍍の前方部からなる全長四二・六㍍の前方後円墳です。前方部は短小であり、こうした墳形は、前方後円墳が定型化する以前の特徴です。

このような古墳は、奈良県桜井市纒向古墳群を中心とし、全国的にも数が限られており、五号墳は東日本において最古の古墳です。三世紀前半の造墓と推定されています。

神門五号墳は、市原における国づくりの過程を明らかにするだけでなく、古墳発生と前方後円墳の起源を考える上できわめて重要な古墳です」

☆考古学的にも、市原市惣社地区は三世紀前半の纏向地域を縮小した副都のごとき様相を呈しており、その時期も、大倭日高見国を建てた天火明の全盛期に相当する。

「倭人伝」、女王国の東、海（伊勢湾）を渡ること千余里にして、また国あり、皆倭種なり」

一方、薩摩吾田に降臨した火瓊瓊杵は、笠沙宮に都して日隈（日前）を再興するや、女神大山祇の娘、木花開耶姫に出会い、妃に娶った。

数年後、彼は日向の西都市妻に遷都すると、日前（ひのくま）を日前（ひのまえ）に改名した。ついで木花開耶姫率いる女神大山祇国（妻の国）を呼び寄せた。この国こそ、「倭人伝」の投馬国なのだ。

〔三宅神社〕（西都市三宅）、火瓊瓊杵の皇居跡とされる。祭神は、天津彦火瓊瓊杵尊。北東一キロメートルに木花咲耶姫を祀る都万神社が鎮座する。北一キロメートルに、日本屈指の西都原古墳群が広がる。

〔都万（つま）神社〕（西都市大字妻）、祭神は桜を神木と崇める木花開耶姫命。神社近くには二人が新婚生活を送った八尋殿の跡や、姫が出産後に沐浴した子湯池があり、子湯郡の地名も残る。西都市妻地区は奈良朝にいたるまで日向の中心地として栄え、近くに国分寺跡もある。

ここに、女王が纏向一之宮に都して倭国を直轄しながら、東に天火明率いる日高見国の東都、西に火瓊瓊杵率いる日前（投馬国）の西都を間接統治できる国体が整った。

二三〇年代に入ると、ヒミコは吉野ヶ里の伊都国に鉄剣を振りかざす天（厳）軍の常勝将軍・武甕槌、吉備軍・オロチ諸軍を常駐させて熊襲の北上に備える一方、副都としても利用してきた。

武甕槌将軍は刺史や大目付のごとき権力をかざしながら、西海中に目を光らせた。吉野ケ里遺跡から鉄刀や鉄剣、畿内系・吉備系の土器が多々出てくるのは、これがためだ。

この地は南国の動静が素早く察知できる上に、万が一、熊襲が北進して来ても筑後川で遮ることができた。この城郭の人々は常勝将軍の指図に従い、河や湖沼を船で巡回しつつ、近隣集落の管理に当たってきた。対馬や壱岐を通じて大陸との往来がある際には、そのつど唐津や那珂津に出

向き、送迎や荷の点検を行った。

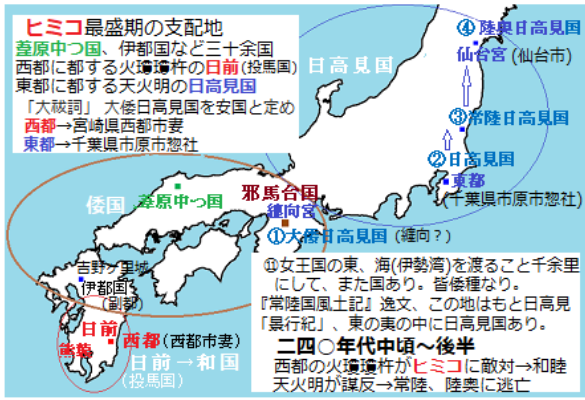
「倭人伝」、「伊都国に到る。・・千余戸あり。世よ王あるも、皆女王国に統属し、郡使の往来に常に駐まる所なり」、「女王国以北には、特に一大率を置き、諸国を検察せしむ。諸国、これを畏れはばかる。常に伊都国に治し、国中において刺史の如きあり」

☆「倭人伝」にある「一大」や邪馬壱国の「壱」の語が隠し言葉であるのは、容易に察しがつく。魏では、天（天子を指す語）や臺（天子が政を行う御殿）は天子のみに許される漢字だった故、「倭人伝」の編者は「天」を一大に、「臺（台）」を壱にあてる他なかったのである。

【吉野ケ里遺跡】、後期前半（倭奴国王朝初期）、丘陵全体を巡る外濠が完成して、内濠も巡った。ここに、天之国軍が進駐してきたらしい。後期後半（日本王朝期）、環壕内に望楼が建った。全体の広さは二五㌶もあって、当時としては最大。

唐津辺りにあった松浦国は大陸との中継地として栄えたが、田畑が少ないことで四千戸の家々しかなかった。多くの人は海沿いの狭い土地にへばりつき、専ら漁業で生業を立ててきた。

伊都国の東南百里には、戸数二万ほどの（倭）奴国があった。この国は、倭奴国王朝の官民や那珂川流域の中つ国勢が伊奘諾を慕って南下する中、山門郡・大和町辺りに足止めされ、やむなく立てた国主無き国だった。そのため、「倭人伝」に奴国と記された。つまり「倭人伝」の奴国の国



体は、元来、倭奴国と同一であった故、山門郡・大和町の地名が今日まで残ったわけだ。

この奴国が女王国の境界の尽きる国だった。その南に、火瓊瓊杵率いる日前（熊襲）が踏ん張っていた。

二四〇年代中頃（女王ヒミコが魏に朝貢した数年後）、火瓊瓊杵はヒミコと仲違いして熊襲の高城千台宮（薩摩川内市）に遷都すると、ヒミコ率いる倭国に覇権争いを挑み始めた。

その最中に、日高見の天火明がヒミコに叛き、退位を迫ってきた。追いつめられたヒミコは、天火明にくしのあまり、火瓊瓊杵と和解して以下の密約を取り交わした。

一、火瓊瓊杵の児海幸彦（火照、火明）を纏向に迎えて、饒速日と天火明の名跡を相続させる。

それと同時に、天火明・日高見国・尾張一派を畿内や東都から追放し、常陸・陸奥に追い払った。

「倭人伝」、「其の八年（二四七年）、太守王頎、官に到る。倭の女王卑弥呼、狗奴国の男王卑弥弓呼（ヒミコの子孫、皇孫火瓊瓊杵）と素より和せず。倭の載斯・烏越などを遣わして郡に詣らしめ、相攻撃するの状を説く。塞曹掾史張政等を遣わし、よって詔書・黄幢を難升米に拝受せしめ、檄をつくりてこれを告喩す」

『日本書紀』、「少彦名命（天火明）、行きて熊野の御碕に至りて、遂に常世郷（常陸国）に適

しぬ。亦曰わく、淡島（友ヶ島淡島か志摩粟嶋）に至りて粟茎（あわがら）に縁（のぼ）りしかば、弾（はじ）かれ渡りまして常世郷に適しぬ」

〔**潮御崎神社**〕（和歌山東牟婁郡串本町潮岬）、祭神は、少彦名命。「記紀」にある熊野御碕は少彦名命が常世国に渡り給うた聖地で、景行期に御崎の静之窟内に勧請したことに始まるという。その後、静之峯、潮見の端に遷座したと伝わる。

『常陸国風土記』、「古の人、常世の国と言えるは、蓋し疑うらくは此の地ならむか」

『日本書紀』や万葉集引用の『常陸国風土記』逸文、「この地（信太）は、もと日高見国」

「景行紀」、「竹内宿禰、東国より還て奏して言さく、『東の夷の中に日高見国あり』、

「日本武尊、陸奥国に入りたまう。・・蝦夷既に平けて、日高見国より還りて・・」

☆「ホツマツタヱ」は、日高見国が仙台辺りに都した王国と伝える。

先の約定に沿って、大倭に降臨した海幸彦（火明饒速日、三代垂仁）はヒミコが他界するや、独り日本朝に君臨して、ヒミコの宗女で天火明遺児の豊鍬入姫（トヨ）を女王に立てなかった。結果、素戔嗚一門とにらみ合う泥沼抗争に陥った。この争いも、火明遺児の豊鍬入姫を二代女王に担ぐことで漸く鎮まった。結局、南国も東国も倭国も、火瓊瓊杵勢一色に染まったわけだ。

『日本書紀』、「（大己貴神）遂に出雲に到りて、・・言わく、『今此の国をおさむるは、唯し吾一身のみなり。其れ吾と共に天下をおさむべき者、蓋し有りや』とのたまう」、

「時に、神しき光海に照らして、浮び来る者あり。・・大己貴神問いて曰はく、『然らば汝は是誰ぞ。・・今何処にか住まむと欲う』とのたまう。対えて曰わく、『吾は日本国の三諸山（みもろ）に住まむと欲う』という。これ、大三輪の神（日本大物主大神）なり」

『但馬故事記』、「（火明）饒速日は勅と瑞宝十種を奉じて妃の天道姫・数多の随身を率い、丹

波の真名井原（籠神社奥宮の地）に天降った。そこで豊受姫からもらった五穀や桑の種を植えつけたり、井戸を掘ったり、田畑を開いて蚕を育てたりした。

豊受姫はこれを見て大いに喜び、田つくりの手伝いにと天熊人を遣わした。後に、饒速日はそこから河内生駒に天降った。天道姫が丹波で産んだ児を天香語山、その児を天村雲という」

【海部氏系図勘注系図】始祖彦火明 ― 児天香語山 ― 孫天村雲 ―

「垂仁紀」、「冬十月、纏向に都つくる。是を珠城宮と謂う」

その後の大倭家は、火明饒速日に絶対的服従を誓うと同時に家名も大日本家と改めた。その結果、軍事筆頭職に返り咲き、さらに唐古や葛城に都することも、天皇と語ることも許された。

二六五年、司馬炎が魏帝を廃して晋を建国した。

翌二六六年、女王トヨが晋に朝貢した直後、火明饒速日は箸墓を泰山に見立てて郊祭し、自ら天神に昇った。その後、南国勢を熊襲と呼んで蔑み、仇同然に敵視し始めた。

〔鏡作神社（鏡作坐天照御魂神社）（田原本町大字八尾）、祭壇中央に天照国照彦天火明命を祀り、左右に石凝姥命と天糠戸命（石凝姥の親神）を配して、天照国照彦火明命なる八咫鏡を御神体として祀る。社伝に、「（崇神天皇六年九月三日、）この地において日御像の鏡を鋳造し、天照大神之御魂（社名から推察して天照御魂神？）となす。今の内侍所の神鏡是なり」とあるそうな。

同時に、大己貴（国作大己貴、大神大物主）に天下を治める国づくりを命じた。数ヶ月後、大己貴は主人やヒミコの意向を推し量りつつ、大神家と大日本家が結束して日本朝を支える体制を立ち上げるや、自ら最高職に留まった。その天下の国づくりとは、纏向宮や大倭国を国ん中として囲む形で、西海道・山陽道（西道）・山陰道（丹波道）・北陸道（越の道）・東山道・東海道（東の方の十二国）・南海道など七道に区分してそれぞれに都督（かみ）（みちぬし）（道主）を置き、連邦制のごとく統治することにあった。

詳しく言うと、西海道には筑紫島、山陽道には瀬戸内海沿いの播磨から長門まで、丹波道には山城・丹波・丹後から西の日本海沿い、北陸（高志）道には若狭・越国・近江北部が組み込まれた。東山道には近江南部・美濃・信濃・毛野など、東海道には熊野東部・志摩・伊勢・三河・遠江・駿河・伊豆・相模・武蔵・甲斐・総・常陸などが編入された。南海道には、愛媛・土佐など四国および紀伊・熊野西部が割り当てられた。

この時期、火明饒速日（海幸彦）は火火出見（山幸彦）に命乞いして謝罪した昔の喧嘩沙汰を思い出しては火火出見を熊襲と呼んで蔑み、武力一辺倒の趣旨返しを画策し始めた。

二七〇年代後半、景行と彦狭嶋は天神から熊襲征伐を詔されたが、大敗して六年も捕らわれた。

「景行紀」、「（四年）、纏向に都つくる。是を日代宮と謂す」、「十二年、熊襲反きて朝貢らず。・・日向国に到りて行宮を起てて居します。是高屋宮と謂す。十二月、熊襲を討たむことを議る」、「彦狭嶋王を以て、東山道十五国の都督に拝けたまう。是豊城命（豊鍬入姫の兄）の孫なり」

『予章記』、「孝元天皇の御弟を彦狭嶋と称す。・・時に南蛮西戎（熊襲）の凶徒等動ずれば、蜂起するの間、皇子、鎮護国家のために当国に止住し給うを、西南藩屏将軍と宣下せらる」

二七〇年代末、天神は仲哀に西海道都督を下命すると同時に、天皇の称号も許した。

☆この時期、天神の垂仁、倭王の景行、都督の仲哀が揃って天皇と呼ばれたことになる。

二八〇年代前半、熊襲征伐を詔された仲哀は、橿日（福岡市）に副都して熊襲征伐に撃って出た。

「仲哀紀」、「天皇、強に熊襲を撃ちたまう。得勝ちたまわずして還ります」

二八五年七月末、磐余彦（神武天皇）率いる東征軍は、火明饒速日を討つべく日向を発った。

「神武紀」、『塩土老翁に聞きき。曰いしく、≪東に美き地有り。青山四周れり。其の中に亦、天磐船に乗りて飛び降る者有り≫といいき。余謂（われおも）うに、彼の地は、六合（くに）の中心（もなか）か。その飛び降るという者は、是饒速日と謂うか。何ぞ就きて都つくらざらむ』とのたまう」